

〈教育実践研究〉

## 教職ゼミにおける教員養成への取組み（4） —模擬授業（小学校道徳科）を中心にして—

矢田貞行\*

### はじめに

これまで『教育研究紀要』において、開放制の学部における教職への意識涵養と基礎的資質能力の育成の1つとして、専門演習での取組みについて紹介してきた。本稿では、主として3年次学生に対する模擬授業の取組み（小学校道徳科）を通して、彼らへの意識涵養・資質能力育成について考察することにする。

道徳教科化に関しては、小学校ではすでに平成30年度から、中学校では平成31年・令和元年度から始められている。これに対応して筆者のゼミにおいても、専門演習Ⅱ（3年次秋学期）の時間を利用して、道徳科の教材研究・学習指導案の作成を行い、主として1、2年次の演習において3年生が教師役を務め、下級生を児童生徒役に見立て模擬授業を実施している。そこで、本稿では今回、小学校の道徳教科化に関する模擬授業の取組みに関して、授業報告を行うことにする。

### I. 「特別の教科 道徳」の授業づくり

上述のように、小・中学校では「特別の教科 道徳」が始められ、学校現場では、これまで培われてきた道徳の授業実践に基づきつつも、新たな道徳科の教科書を用いた教科としての授業が行われてきている。道徳科の授業は、主として担任教師が行うとされており、教育実習においても実習生の多くに道徳科の研究授業が課されるなど、求められる教員の資質能力の1つとして学校現場でもその指導力が重視されている。

そこで、本ゼミにおいては教員志望の学生全員（12名）にそれぞれの希望する校種（小・中）に応じて、道徳科の模擬授業を行うことを求めた。まず、ゼミの開講時に「特別の教科 道徳」新設の経緯やその意義、指導上のポイント等を踏まえて、道徳科における学習指導案の立て方について講義を行った。その後、学生が各自で教材研究に取り組み、学習指導案を作成するとともに、それと並行して適宜個別指導を実施した。

その際、本ゼミでは教師用指導書を予め学生に見せ、それを参考にして学習指導案を作成することを勧めている。学生たちは、すでに諸々の教科指導法の授業において学習指導案の立て方について履修しており、ある程度その概要に関しては周知している。また、本ゼミにおける専門演習のねらいは、学習指導案作成自体が目的ではなく、教科化された道徳科の授業を、どのように教師として生徒を前に限られた時間内で行い、実践力を培うかを重視している。

模擬授業の直前には担当学生と打合せを行い、学習指導案に基づく授業デザインの提示、板書計画に基づくフラッシュカード等を用いた板書の試行、授業展開のポイント、留意事項の確認、グループワークの進め方等について詳細な予行演習を行ってきた。

---

\* 東海学園大学スポーツ健康科学部

## II. 小学校道徳科の学習指導案の作成

次に、模擬授業を行った学生の事例（小学校6年「その思いを受けついで」）を取り上げることで、教科化された道徳科に基づく模擬授業の一端を紹介することにした。

本授業では、主人公の「ぼく」が、病気のために余命いくばくもない祖父との見舞いを通じて交わす心の交流とその死後、祖父の枕元から自分の誕生日を祝うために用意していたのし袋を見つけ、祖父の深い愛情を感得する。そして、その死を乗り越え、前向きに生きていこうとする「ぼく」の気持ちを共感させることを通して、自他の生命を大切にする気持ちを培わせることを目当てとしている。（「主題設定の理由」）

そして、本授業のねらいは「生命尊さ」をテーマに命が世代間のつながりによって生まれ、祖父母から両親、さらには子どもへと受けつがれいくかけがえのないものであることを気づかせ、力強く生きていこうとする意欲を高めようとするところにある。

評価の観点は、人間の命が近親者のつながりや支え合いの中で生まれ、受けつがれていく尊いものであることに気づくところにある。また、余命3か月の祖父である「じいちゃん」が、孫の「ぼく」のために用意した「のし袋」を見つけた日までの彼の気持ちの変化を通して、死の悲しみを乗り越え、力強く生きることの大切さを感じさせることも重要な視点となる。

なお、近親者を失い、死を体験した児童もいることが当然想定されるので、ここではこうした子どもへの配慮も併せて考慮した上で授業を行う必要がある。

（なお、学習指導案は表1、授業で使用したワークシートは表2、板書計画は図1に示す通りである。）

表1. 小学校道徳科 学習指導案「その思いを受けついで」

	児童の学習活動	主な発問と予想される児童の発言	指導上の留意点 (○) 準備物 (●) 期待する児童の学習 (※)
導入	1. 命とはどんなものか、自分の考えを発表する。	発問①「あなたにとって、命とはどんなものですか。」 ・大切なもの。 ・1つしかないもの。 ・いつかは終わってしまうもの。 ・生きていく上で必要なもの。	●命を表わすイラストを貼り、その周りに児童の意見を書き込む。
	2. 教材「その思いをついで」を読む。 3. 場面整理を行う。 4. グループワークを行って話し合う。	発問②「登場人物は、誰がいたでしょう。」 発問③「じいちゃんの命が『あと3か月』と聞いて声を上げて泣いたとき、『ぼく』はどんな気持ちだったでしょう。」 ・そんなの信じたくない。 ・あと三か月だなんて悲しすぎる。 ・じいちゃんに死んでほしくない。 ・少しでも長く一緒にいたい。 発問④「『ぼく』が毎日欠かさずに病院に通い、じいちゃんに話しかけていたのは、どんな思いがあったからでしょう。」	●教科書の挿絵を活用する。 ○母の言葉「命には、いつか終わりが来るのよ。」を提示することにより、深い悲しみの中にいる「ぼく」が、命には限りがあることを理解したことを捉えさせる。  ○残りの命を知っているという状況を押さえた上で、懸命にじいちゃんを励まし続ける「ぼく」の気持ちを考えさせることにより、

<p>展開</p>	<p>5. じいちゃんの思いを受けつぐとは、どのように生きていくことかを考える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今までお世話になった分、今度は「ぼく」がじいちゃんの役に立ちたい。</li> <li>・じいちゃんのために「ぼく」にできることは、何でもしてあげたい。</li> <li>・できるだけ、じいちゃんの側にいるよ。</li> <li>・「ぼく」は、じいちゃんが大好きなんだ。</li> <li>・じいちゃん、死なないで。</li> <li>・この時間がずっと続いてほしい。</li> </ul> <p>発問⑤「しわくちやの『のし袋』の中にあつた手紙の文字を見たとき、『ぼく』はどんな思いになつたでしょう。」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・じいちゃん、いつも「ぼく」のことを思ってくれて本当にありがとう。</li> <li>・じいちゃんと過ごした3か月を、「ぼく」はずっと忘れないよ。</li> <li>・じいちゃん、ずっと見守っていてね。「ぼく」は、力強く生きていくよ。</li> <li>・悲しいけれど、前を向いて生きていくよ。</li> </ul> <p>発問⑥「その思いを受けついで『思い』とは、どんな思いでしょう。」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・じいちゃん分まで生きる。</li> <li>・強く生きていく。</li> </ul>	<p>じいちゃんに少しでも長く生きてほしい、じいちゃんのために何かしたいと思う「ぼく」の気持ちに気づかせる。</p> <p>●実際にしわくちやの「のし袋」を提示する。</p> <p>○「ぼく」がつぶやいた言葉について話し合わせることにより、じいちゃんの深い愛情とともに、命を大切に前を向いて生きていくとする「ぼく」の気持ちに気づかせる。</p> <p>○教材名の交えた発問にすることで、本時の目標である命の大切さ、力強く生きることの大切さに気づかせる。</p>
<p>終末</p>	<p>6. この時間に考えたことや感じたことをまとめる。</p> <p>7. 教師の説話を聞く。</p>	<p>発問⑦「今日の授業を受けて、命とはどのようなものだと感じましたか。」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・やっぱり大切なもの。</li> <li>・大事にしなければいけないもの。</li> <li>・精一杯生きるべきもの。</li> </ul> <p>相田みつをの「人生において最も大切なとき、それはいつでも、いまです」という名言を紹介して、今を精一杯生きることの大切さについて話す。</p>	<p>○発問①と同じ発問をすることで、自分の考えの変化や強い意思を持った考えに気づかせる。</p> <p>※発問①のときより命は大切だ、強く生きなければならぬ、という考えを持つことができる。</p> <p>○名言を聞き、常に今を大切に、今を一生懸命に精一杯生きていくことの大切さを伝える。</p>

### Ⅲ. 小学校道徳科の模擬授業の実施とふりかえり

授業担当者の学生は、今回模擬授業を行うに当たって春学期（中学校保健）に行った模擬授業の反省点や課題に則って、板書計画、フラッシュカードや資料の準備に時間をかけている。その甲斐あってか、「板書計画をしっかりと立て見本を準備しておいたため、授業途中で困ることなくスムーズに板書できた」と述懐している。また、小学校ならではの課題である漢字の書き方について触れている。「使用するフラッシュカードは、学年に応じた漢字の学習進度に合わせる必要があり、担当した6年生の教材では、たとえばそれまでに習う漢字を事前に調べ、6年生では習っていない漢字であったが、読み仮名を用意し、児童が読めるように準備する必要性も生じた」ことを明らかにしている。

次いで、「教卓上の資料を見過ぎ、その原因が学習指導案の読み込みが甘く、しっかり授業内容が頭に入り切っていなかったため、資料にかなり頼ってしまい、下ばかり向いてい

表2. ワークシート

道徳「その思いを受けついで」ワークシート

年 組 氏名

☆しわくちやの「のし袋」の中にあつた手紙の文字を見たとき、「ぼく」はどんな気持ちになつたかな。

- ・自分の意見
  
- ・友達の意見

☆その思いを受けついで「思い」とは、どんな思いだろう。

- ・自分の意見
  
- ・友達の意見

☆今日の授業を受けて、命とはどのようなものだと感じましたか。

☆自己評価をしよう！（今日の授業をふりかえって、あてはまるものに○をつけよう！）

項目	よくできた	できた	がんばろう
自分の考えを持つことができた。			
友達の考えを聞いて、共感したり理解することができた。			
新たな発見があつた。			
これから大切にしていきたいことを考えることができた。			

た」という春学期の反省から、学習指導案を充分読み込み、授業内容を頭に入れておいた上で授業を始める重要性を挙げている。教師は、児童1人1人と対面して授業を行うので、授業の流れを事前に頭に入れておき、授業時は児童の方を見て、全体の様子を把握しながら授業を進めていかなければならないからである。

次に、「範読中に机間巡視していたが、児童の様子を見るために視線を教科書から児童の方に向けると、次の文章を飛ばしてしまったり、読み間違えてしたりした」点が挙げられており、「事前に授業で取り扱う資料を熟読しておくべきである」との反省についても述べている。（前回の反省を踏まえて、）教師が範読中に何度も読み間違えていては、「児童は教材の内容が理解しにくく、児童の様子を把握しながら範読するためにも、今回は1回教材に目を通しただけであったが、2回、3回と目を通す必要がある」としている。

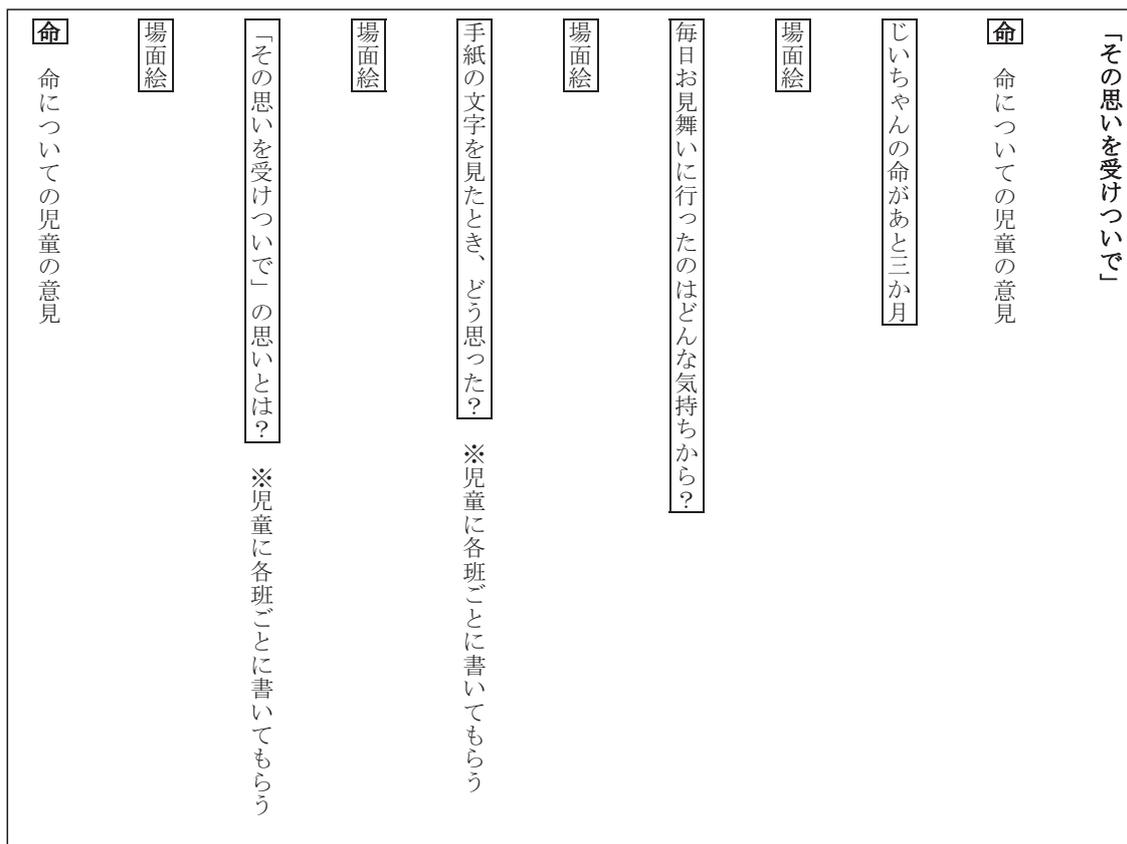


図 1. 板書計画

さらに、机間巡視のスピードも反省点として挙げている。「教師の範読の際、机間巡視は自分ではゆっくり行っていたつもりだったが、実際には想像していたより早く歩いていたため、もっとゆっくり歩いたり、児童の間で止まって読んだりしてもよいと感じた」としている。また、授業の展開の中では、「1人1人に時間をかけ過ぎてしまったのではないか」との反省の弁も見られた。「実際の教室で、もっと大勢に対して机間指導を行おうとするならば、時間をかけ過ぎず、躓いている児童に対して少しアドバイスをしたり、よい内容を書いている児童を褒めたりする余裕が授業者に必要な」と述べている。

発問内容については、特に肝心な中心発問である「その思い」とは誰のどんな思いかという発問が、児童の反応を見ているとやや分かりにくかったようである。「誰の思いなのか分からない、との声が上がっていたため、発問を『その思い』とはじいちゃんの（あるいは、主人公である孫の大地の）思いかというように、主語を固定して聞くべきだった」と反省している。これらの反省点から、「授業を行うためには、かなり綿密な教材研究が必要だと改めて考えた」としている。

最後に、「模擬授業全体を通しては、春学期の保健よりもスムーズに雰囲気よく授業を進めることが

表 3. 模擬授業を行った学生の感想

<p>今回、模擬授業を行うに当たって、まず前回の反省を踏まえ、板書計画、フラッシュカードや資料の準備に時間をかけた。板書計画をしっかりと立て、見本を準備しておいたため、授業途中で困ることなくスムーズに板書できた。フラッシュカードは、小学6年生までに習う漢字を事前に調べたことによって、たとえば「お見舞い」の「舞」は小学6年生では習っていない漢字であったが、読み仮名を用意し、児童が読めるように準備することができた。</p> <p>実際に模擬授業を行い、動画で振り返ってみたところ、まず反省点として教卓上の資料を見過ぎである点が挙げられる。学習指導案の読み込みが甘く、しっかり授業内容が頭に入りきっていなかったため、資料にかなり頼ってしまい、下を向いていた。教員は児童1人1人と向き合って授業を行うので、授業の流れを事前に頭に入れておき、授業時は児童のほうを見て、全体の様子を把握しながら授業を進めていかなければならない。</p>
--

次に、範読中に机間巡視していたが、児童の様子を見るために視線を教科書から児童のほうに向けると、文章の一部を飛ばしてしまったり、読み間違えてしまったりした点が挙げられる。反省点として、やはり事前に授業で取り扱う資料を熟読しておくべきだった。教師が範読中に何度も読み間違えていては、児童は教材の内容が理解しにくい。児童の様子を把握しながら範読するためにも、今回は1回教材に目を通しただけであったが、これからは2回、3回と目を通そうと思った。

さらに、机間巡視のスピードも反省点として挙げられる。範読の際、机間巡視は自分ではゆっくり行っていたつもりだったが、実際には想像していたより早く歩いてしまったため、もっとゆっくり歩いたり、児童の間で止まって読んだりしてもよいと感じた。他方で、1人1人に時間をかけ過ぎてしまったかなと思った。もっと大勢に対して机間指導を行おうとするならば、時間をかけ過ぎず、つまづいている児童に少しアドバイスを送ったり、よい内容の児童を褒めることもできたのではないかなと思った。

中心発問の内容については、『その思い』とはどんな思いか』という発問が、児童の反応を見ているとやや分かりにくかったようだ。「じいちゃんの思いなのか、主人公大地の思いなのか分からない」との声が上がっていたため、発問を「その思い」とはじいちゃんの（もしくは大地の）どんな思い、というように主語を固定して聞くべきだった。これらの反省点から、授業を行うには、かなり綿密な教材研究が必要だと改めて痛感している。

模擬授業全体を通しては、春学期の保健体育よりもスムーズに雰囲気よく授業を進めることができたと思う。これは、この1年間ボランティアで〇〇小学校に行かせていただいていることが成果の現れの1つである。これからも実際の現場の様子を学びつつ、学業にもより一層力を入れ、教員採用試験現役合格を目指して頑張りたい。

できたと感じた」と、その成長ぶりを学生自らが感じる旨の発言をしている。これは、この1年間、彼女自身が行った小学校でのボランティア経験の成果である。また、「学校現場での学びを今後も続け、児童と信頼関係のある教師になり、教材研究をしっかり行い、児童を退屈にさせない授業を行う」と締め括っている。

表4. 『みんなの声』（小学校道徳科）



みんなの声		授業者 〇〇〇先生
よい点	改善すべき点	
導入部から「命」とは何かについて短刀直入に尋ね、冒頭から正鶴を射た回答（「いつかは終わる」「思いを受けつぐ」）が寄せられている。児童も積極的に挙手して発言するなど、授業の雰囲気も頗るよい。また、頻繁に挙手をする児童よりも、敢えて他の児童の手が上がるのを待つという姿勢もよかった。	グループワークの児童の分け方は、横で指名するよりも縦の席順の方がやりやすい。 範読の際、読み間違い（病院→病室）が気になった。 児童の回答に対しては、肯定的に対応するだけでなく、速回しに揃さぶることも必要だ。	
教師の範読も声がよく通っており、感情や思いが込められており、児童の側にも伝わってくる。	4人が一斉に板書すると書きにくいので、2名ずつ位がよい。	
場面絵が状況把握に効果である。「余命が3か月の祖父の様子」や「切迫した主人公の気持ち」が伝わってくるようだ。	感想	
祖父の亡きあとに見つかったクチャクチャの『のし袋』を実物で示したりして、臨場感を児童に持たせるよう、教師が工夫している。	小学校での授業補助などのボランティア活動の成果がふんだんに現れた授業でした。学校現場で児童の様子を日々見つめ、小学校の先生たちの一挙一動を思い浮かべながら実践している、友人好みの授業でした。こうした学校経験を経ていないと、ちょっと真似できないものだと思います。「うまいなあ」と、授業の節々の指導で感心していた次第です。	
まず1人で考えさせ、次いでグループで意見交換を行わせるというステップを踏んで、教科化された道徳の授業の趣旨に沿って常に進めている。	命という比較的難しい教材で、しかも小学6年生という思春期に入ったばかりの子どもたちを相手にするので、いろいろな配慮をしなければならぬ授業でした。授業後〇〇先生からの質問もありま	
板書を児童に書かせることで、意見交換の場としても活用している。また、児童が漢字を間違えたとき（一瞬懸命→一生懸命）も、「間違えてよい」と児童をフォローするなど、寛容さや励ましを示している点が良い。		



#### IV. 小学校道徳科の模擬授業の感想

模擬授業を受けた学生からは、次のような内容のレポート（抜粋）が提出されているので、併せて掲載しておきたい。

##### (1) 学生 A

今回ゼミで模擬授業を受けて、3年生の段階でここまで完成度の高い授業をしていたことに驚きました。第1回目は小学校向けの道徳の授業を受けました。教科書を読んでいくとき、聞き取りやすく、漢字の読みも正しく完璧だと感じました。聞き取りやすくと、小学生の子も集中して聞いてくれるし、先生が正しい漢字の読み書きをすることで子どもたちも正しく漢字を覚えてくれると思います。

黒板の使い方もとてもよかったです。挿絵も黒板に貼ることで、子どもたちが場面を想像しやすくなり、よりよい意見が出やすくなると思います。また、黒板を消さずにしっかり残していたのも、後で見るとき話しの流れを把握しやすいので、高評価でした。

小学生がワークシートに書いた意見に授業者が、スタンプを押すのも子どもが喜び、やる気を引き出すのに効果的でした。グループワーク形式の授業で、子どもたちに考えさせることで彼らの想像力を高める方法もとてもよかったです。

自分は、教職志望ではありませんが、人に指導する点では同じであるため、今回の模擬授業で相手によって指導を変えていくことの重要性を学びました。この経験を今後の健康トレーナーを目指す上で、活かしていきたいと思います。

##### (2) 学生 B

私は、模擬授業を受けて3年生のどの先輩も本当の先生に授業を受けているみたいで、とても驚きました。その理由として、児童を喜ばせるために、スタンプやイラストなどの細かな工夫がなされていることです。実際に私が小学生だったら、こんな工夫があったら嬉しいし、そのために頑張ると思います。

もう1つの理由として、道徳の授業は答が1人1人異なる中で、すべてを否定したりせずに少しアド

バイスをしてみたり、「何でこう思ったの」などの問いかけをすることによって、考えさせられるとてもよい授業だなと感じました。

私は、3年生を見て、積極的に学校の中に入り、授業補助やボランティアをしていて、経験を積んでいることに感嘆しました。人前に立った姿勢など、自分とは比べ物にならないことを痛感しました。

私も遅ればせながら12月から生まれて初めてボランティア活動を経験するので、足りないことやうまくできないことも多いですが、いろいろな経験を積んで今後につながるようになればいいなと思ってます。

### (3) 学生C

模擬授業を受けてみて、先輩の授業は分かりやすく、楽しめました。板書では、挿絵や児童の意見を載せたりして、見やすい文字で書かれており、本物の先生のような板書でした。先生の範読も聞いていて、容易に内容がイメージできたし、速度もゆっくりで分かりやすかったです。

私は、教職志望ではありませんが、模擬授業を通して人に教える（コーチング）ことはとても難しいと感じました。先生の立場だと、思い通りに子どもたちは動かないし、答も直ぐに回答できないので、戸惑いも生じます。しかし、3年生の方々は、即座にどんな答えでも対応し、回答に導かせてくれました。

今回の体験を踏まえて、人にコーチングをするときやコミュニケーションを交わすとき、こうした経験を活かしていきたいなと思いました。

### (4) 学生D

模擬授業を受けていて、自分が小学生のときに受けた道徳の授業よりも楽しく感じたし、小学校を卒業して7年も経っているので、感じることも多かった。小学校の頃はまだ周りからの刺激も少なく、人のことを考えて行動するというよりは、どちらかと言えば自分中心に動いてしまうところも多かったように思う。したがって、道徳の授業は人の気持ちを考える授業だから苦手と思っていたが、大学生になり2つ年上の先輩の授業を受けて、道徳は楽しいと思えたと、考え直したところもあり、内容の濃い授業だと感じた。

小学校も中学校も高校もどの先生も、自分にとっては大きな存在だった。小学校の先生は、自分がソフトボールを始めるきっかけとなった先生で、その人のお蔭で今もこうして大学の強化指定であるソフトボール部に入部している。あの先生の「肩が強いね。ソフトボールに向いていると思うよ」という言葉がなかったら、人生の半分位の時間を費やしてきたソフトボールに出会えてなかったと思う。

……（中略）……

先生は、自分を変えてくれた大切な人の1人だから、先輩方がこれからそういう人になっていくと思うと、とても凄と思うし、全力で応援したい。また、子どもたちにより影響を与え、信頼される先生になってほしい。

### (5) 学生E

以前矢田先生のゼミで模擬授業を受けたので、着目すべき所、学ぶべき所を整理して受講できた。僕は、模擬授業を少しだけしたことがあるが、その時に参考にしたのは先輩の模擬授業であった。その時感じたことは、しっかりと先輩の授業を聴いてよかったということである。導入→展開→終末と授業を進めていく中で、何をすべきか、どこを工夫すべきかを先輩から学んだ。見て学ぶ、よい所を盗む、よくない所は自分も気をつける。そんなサイクルを数週繰り返すことで、自然と流れが身に付いてきた。実際他の先生のゼミで軽く模擬授業をしたが、特に慌てることなく、円滑に進めることができた。また、その授業を先生も評価してくれたので、とても自信になった。このように、模擬授業を受けるということは、とても自分の成長につながり、スキルとなることを身を以って実感することができた。真面目に取り組んでよかったと思っている。

### (6) 学生F

私は、模擬授業を受けて気づいたことがいくつかあります。まず、服装についてです。当たり前だと思うのですが、先輩方は全員スーツを着用していました。しっかりと正装で、びしっと決めている印象を持ちました。人はまず、見た目から印象を決める生き物です。その第一印象が非常に大切で、その後の流れを大きく左右する要素だと感じました。

次に、表情です。表情は皆さん笑顔で、口角が上がっていました。しかし、緊張の中の笑顔も必要です。「教師の笑顔は、子どもの笑顔につながる」。そんな場面も見ることができました。

… (略) …

先輩方の様子を見ると、率直に「大変そうだな」と思いましたが、その中で一緒に頑張ろうという絆が見えたり、学ぶ楽しさが見えた所がとても羨ましく感じました。

### (7) 学生 G

3年生のどの模擬授業も完成度が高く、自分がやがて先輩たちのように授業を本当に行えるのかすごく心配になった。しかし、自分が教師になったとき、使うことのできる技術をたくさん学ぶことができた。たとえば、子どもの誰かがよい発言をした時など、みんなで拍手をすることであったり、フラッシュカードの有効な使い方、ワークシートの活用法、机間指導の際の子どもとの関わり方など、模擬授業を実際に受けてみないと分からないことを知ることができた。

また、道徳の授業を受けたことで、なぜ道徳の授業が必要なのか、教育課程や特別活動の教職科目で知識としては知っていたが、自分が体験することで小中学校で道徳を行うことの大切さを身を以って知ることができた。

身近な先輩の完成度の高い授業を受けたことで、自分の心の中でより教師になりたいという思いが強くなった。

### (8) 学生 H

先輩方の授業を受けて、正直圧倒されました。… (略) …道徳は、ある意味で心についての学習です。生徒の反応を考え、それに対して答えることも難しく、それを否定するのではなく、よい所を拾って児童の意見を褒めていました。児童の側からすると、先生に褒められると気持ちよく、自分の意見に自信が持てるようになります。

また、先輩の使うフラッシュカードや図がとても上手に作られていて、分かりやすさが教室内に伝わっていました。

グループで行う議論の機会も多く設定されており、勿論1人1人の意見も大事ですが、それをグループ内で発表し、周りに周知することで、コミュニケーション能力の向上にもつながります。そうした学習意図がグループワークの中にも秘められていたと思います。

さらに、グループワークでは、どのような意見が出されるのか、またその内容や時間も千差万別でタイムオーバーになるなどの不測の事態が予想されましたが、先輩方の授業では臨機応変に対応されていて、見事に時間内で授業を終えていたのは、さすがだと思いました。

## おわりに

以上、このような模擬授業を受けた学生の多くが3年生の模擬授業の指導力の高さに驚嘆し、自分達が小・中学校のとき受けた道徳の授業を念頭に置いてコメントを書いている。

詳細な指導計画の下で、分かりやすく作成されたフラッシュカードや理解を促すためのワークシート、さらには教師の児童に対する適切な働きかけ、教師としての仕草の数々に驚嘆している学生も少なくない。

また、具体的に教員を目指す先輩たちの姿を目にすることで、その方向性の示唆を得たと述べている学生もいる。学生達が2年次以降教員を目指す上で、この模擬授業はこれから何を学び、自ら何をすべきかについてその見通しを明確にする絶好の機会となり得たと確信する。

## 参考文献

『教師用指導書 小学道徳 生きる力6 研究編』日本文教出版、平成31年。

くは（今日は、話せるかな。）と、小さな期待を胸に大好きなじいちゃんに毎日会いに行った。

そんなある日、学校から帰るとお母さんがいなかった。げんかに紙がはってあった。『お帰り。病院にいます。』言い知れぬ不安がぼくをおそった。ぼくは、無我夢中で家を飛び出した。

じいちゃんは酸素マスクをつけられて、ピツ、ピツという機械の音だけが病室にひびいていた。しゅんじに、ぼくはいろいろなことを察した。ぼくは、目を閉じて静かに横たわっているじいちゃんの手をにぎった。小さいころから何千回もつないでもらったじいちゃんの手だった。「ハア、ハア。」静かな病室には、じいちゃんの息づかいだけがあつた。ぼくはじいちゃんの耳元で言った。

「じいちゃん。きつと元気になるよ。もう少ししたらきつとよくなるよ。そしたら、じいちゃんの大好きな温泉にまたいっしょに行こうね。ぼくが連れて行ってあげるよ。だから、じいちゃん。元気出してよ。がんばるんだよ。」

そのときだった。じいちゃんは無言のまま、このぼくの手を弱いながらもにぎり返してくれた。その夜おそく、じいちゃんは、ぼくと手をつないだまま天国に旅立った。ぼくは、じいちゃんのとんに顔をうずめて声を上げていっばい泣いた。

しばらくたって、看護師さんが、じいちゃんの酸素マスクを外そうとちよつと頭を持ち上げてまくらを外したときだった。

「あらっ……。」

まくらの下にあつたのは、しわくちやののしぶくろだった。

「大ちゃんへ。お誕生日おめでとう。いつもおみまいに来てくれてありがとう。これからもずっと大ちゃんのことを見守っているよ。」

ふるえて力のないじいちゃんの字だった。ぼくの誕生日は、一か月も先だった。

「じいちゃん……。」

じいちゃんの温かな、そして強い思いがぎゅつとぼくの胸いっばいにおし寄せた。

（出典…文部省『読み物資料集』）

その思いを受けついで

ほくには、小さいころからほくをうんとかわいがってくれたじいちゃんがいる。

今日、学校から帰ってくると、お母さんが深刻な顔をして言った。

「ねえ、大地……。この前じいちゃんが入院したとき、お母さんは、長生きするようにいろいろとみてもらっているのよって言ったわね。でもね、ほんとは……。じいちゃんは重い病気であと三か月の命と言われて……。大地にはずっと言わないでおこうと思っただけ、やっぱりきちんと話して、じいちゃんとの残された時間をだいじにしてほしいと思ったの。」

「えっ、あと三か月の命ってどういうこと?」

ほくは頭が混乱して訳もなくトイレに閉じこもり、こみ上げる悲しさに声を上げて泣いた。

目を真っ赤にはらしてやっとなってきたほくを見て、お母さんが言った。

「お母さんだつてずうつと、もつともつとじいちゃんといっしょにいたいわ。でも、命には、いつか終わりが来るのよ。」

「じいちゃんは、病気のこと知ってるの?」

「ううん。お母さんには言えない。悲しむ顔を見るのはつらいし、それより一日でも多くじいちゃんとの限られた時間をたいせつに楽しく過ごしたいわ。だから、このままそつとおこうと思うの。」

「うん……。」

次の日から、ほくは、放課後にみんなと遊ぶのをやめて、学校から帰るとお母さんが用意してくれたほくの弁当を持って、自転車で病院におみまいに行った。

「じいちゃん。いっしょに食べよう。」

「うん。大ちゃんと食べるとご飯は特別においしいからな。」

「いっばい食べて早く元気になってよ。」

「うん。またいっしょに温泉に行こう。」

ほくとじいちゃんは、学校の話や小さいころの思い出話をしながら楽しく夕飯を食べた。

ほくは、毎日欠かさず病院に行った。じいちゃんは、ほくが来るのを楽しみにしていて、病院の売店でほくの好きなおかしを買っては、いつもまくらもとに置いてくれた。

でも、日に日にじいちゃんはやせていった。一か月もたつと痛みのために強い薬を使うようになって、意識がもうろうとするときがあった。そんなときは、ほくは静かにベッドのそばのいすにすわって、目を閉じているじいちゃんの顔を見て話した。

「じいちゃん、元気出してね。注射は痛いけどよくなるためだよ。がんばらないとだめだよ。早くよくなって、いっしょに温泉に行こうね。」

お母さんに言われてから約三か月がたった。じいちゃんの食事はてんてきに代わった。もう二人でいっしょに夕飯を食べることはできなくなった。でも、ほ